光の国

RAN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
光の国

【Ｎコード】
Ｎ２３２４Ｔ

【作者名】
ＲＡＮ

【あらすじ】
『世界の果てに存在する永遠の楽園。
万物が共存する争いのない国。
そこに行けるのは選ばれた神の子供達だけ』

身寄りのない少年は、村で孤独だった。
彼は記憶に残る言い伝えを信じ、村を出た。
旅の途中で出会った翼人の少女とともに、彼は世界の真理を探していく。

※サイト、dノベ転載

ー己の目的を定めること ー<1>

少年は自分の生活に疑問を持っていた。
いつもいつも、自分のいるべき場所はここじゃないと思っていた。
いつかココを抜け出したいと考えていた。
少年の村に伝わる伝説に『光の国』というものがあった。
少年はそのことを何とはなしに考えるようになっていた。

『世界の果てに存在する永遠の楽園。
万物が共存する争いのない国。
そこに行けるのは選ばれた神の子供達だけ』

おとぎ話だろうと、普通の人はきっとそう考えるだろう。
だが少年は、その伝説を信じて村を出た。
どこにあるかもわからない楽園を信じて。
自分の居場所を求めて。
少年には、他に信じられるものがなかったから。

その少年の名は———カルという。

ドサっ。
ベッドに無造作に荷物を置く。
ため息を吐き、カルは宿の自分の部屋を出た。

カルは『光の国』の情報を集めるために町を歩く。
目的地がわからないのだから、行く場所も定まらない。
いつも気のおもむくままに歩き、進んでいた。

たまにめぼしい情報があれば、それの通りに動いた。
他にどうしようもなかったからだ。
しかし、当たり前のことだが、聞く情報のほとんどはガセばかりだった。
そして、それなりに情報を聞いていると、だんだん話が似たようなものが出てくる。
そういうものは、ガセ決定だ。
嘘はそんなに作れない。ほとんどの話が似たり寄ったりな話だった。
そして、今回訪れた町もそうだった。
カルは町を出る決意をした。
そう決意したら彼の行動は早かった。
行き先は決めていない。これから宿に戻って、地図でも見て、気の向くままに行くだけだ。
道があれば、そちらに行く。今までもそういう風に旅をしていた。
そうしようと宿に向かおうとした時だった。裏路地から声が聞こえてきた。

「……いや！」
カルは普段は人のことに関心を示さないのだが、なぜかこの時は興味を持った。
これが彼の生活を変える第一歩になるとは、この時の彼はまだ知らない。

「おい、あんたら何やってんだ」

カルが裏路地に入り声をかけると、三人のいかにも力にものをいわせそうないかつい男達がカルの方を向いた。
男達の間から襲われていた人物の顔が見えた。

翼人の少女だった。
不揃いの短い黒髪、翼人特有の本来人間の耳がある場所にある薄く色のついた小さい羽根、背中の真っ白な大きな翼だった。
耳の場所にある羽根と、背中の大きな翼は翼人の特徴だ。
翼人は昔、その姿の美しさのため見世物にされ、乱獲されていたのだが、絶滅の危機のために保護されていた。
しかし、そうすぐに切り替えられない人間もいるようだ。翼人の扱いは未だにひどい。
カルは、差別というものを嫌悪していた。
なぜなら、彼には親がなく、そのため村の人々からも差別され、軽蔑され、友と呼べる人もいなかったからだ。
彼は一人で生きていた。
彼は、人間が自分よりも劣っているもの、自分と違うものを差別する感情をひどく嫌っていた。
そして、彼は腕に自信があった。
良い鬱憤晴らしの素材は揃った。

「その少女を放せ。翼人は保護されているはずだ」
「んだ、この野郎！」
「そんなこたぁ知るかよ！」
「かまわねぇ！　やっちまおうぜ！」

それぞれの言葉を口にして、男三人はカルに襲い掛かってきた。
カルは彼らの動きを見切れた。まるでスローモーションであるかのように。
伊達に長い間旅をしてきてはいない。
一人で生きてきたのも、こういう時は役に立つと、カルは少し自嘲的な気分になった。
それぐらいの余裕がある彼にとって、彼らを打ちのめすことは何ら難しいことではなかった。

勝負は一気にかたがついた。

「……う……ちきしょー！　覚えてやがれ！」

負け犬のお決まりの台詞で男達は逃げ出した。

「……うるさいヤツら……」

カルは舌打ちすると、翼人の少女の方を振り返った。

「……」

座り込んでいる少女は、怯えたようにこちらを見上げていた。

「大丈夫か。安心しろ。俺はお前に危害を加えるつもりはない」

「……」

少女の目線に合わせて、カルがしゃがみこむ。

だが、少女は変わらず警戒の色をとこうとしない。

カルはめんどうだな、という表情を隠そうともしなかった。彼は大きくため息をつく。

「……まいったな。もしかして言葉がわかんないとかか？　俺はお前に危害を加えるつもりはない。……俺はカル。お前は？」

まずは名前を聞くところから始めることにした。

少女は、怯えの表情はあるものの、警戒の色が薄れてきたようだ。

「……セイラ」

小さな声で、そう答えた。

どうやら言葉はわかるようだ。カルはまずそこに安心した。

しかし、何か違うような気がする。でも何かわからない。

大したことはないだろう、とカルは流すことにした。地域ごとに言葉が違うことがある。そのなまりか何かだろうと考えたのだ。

少女――セイラは、恐る恐るカルと視線を合わせた。

近くでちゃんと見ると、結構きれいな顔立ちをしていた。乱獲されたのもうなづける美しさだった。

きれいなものを嫌う者はまずいないだろう。
カルは思わず、一瞬止まって、見てしまった。
だが、すぐに気を取り直す。
「とりあえず、俺と一緒に来るか？」
カルが手を差し出すと、セイラは恐る恐るその手を取った。
カルは、めんどうだな、と思いつつも、なんとなくこの少女を放っておけなかったのだ。

ー己の目的を定めること ー＜2＞

「お前の住んでいる所はどこだ」

カルが抑揚のない口調で聞く。

今カルとセイラは、カルの取った宿の部屋にいた。

とりあえず一度関わってしまった以上、ちゃんとそれなりの対応をしなければいけない。

カルは変なところで責任感があった。

とりあえずこの地域の地図を、セイラを座らせたテーブルの上にバっと広げる。

そして、懐にある煙草の箱から、一本取り出し、同じく懐にあったマッチを取り出して擦って火をつけた。

煙草をくわえて、一呼吸おくと、気分良く大きく煙を吐き出した。

煙草を覚えたのはここ最近のこと。

情報を集めるために酒場に行ったり、少し怪しげな場所に入ったりすることもある。

そこでの仲間の影響で始めた。一回始めると、習慣づいてなかなかやめることができない。

カルが煙草を吸い始めた途端、セイラは顔をしかめた。

「カル、臭い」

そう言って、カルの持っていた煙草を取り上げ、灰皿に押し付けた。

「何すんだよ」

カルは明らかに不機嫌な顔で、セイラを睨んだ。

セイラは、先ほどの怯えの表情はどこへやら、カルをきつく睨みつける。

「その棒は変な匂いがする。とっても嫌な感じがする。良くないも

のだと思う」
「そんなのお前に関係ないだろ。っつーか、何で俺のこと呼び捨てなんだよ」
「私はその匂いが嫌いなの。関係ないなら、私がどう呼ぼうが関係ないでしょう」
「……」
じーっとお互いに睨み合った状態が一瞬。
「……わかったよ。お前のいる前では吸わなきゃいいんだろ。……で、話進めるけど、お前はどこから来たんだ？」
カルの方が折れた。しょうがないな、という顔で、セイラの目の前の椅子に腰をかけた。
「……」
しかし、セイラは言葉を発しない。
気まずそうにカルから少し視線をそらした。先ほどの勢いはどこへやら。
カルは訝しげに眉をひそめて、セイラの顔を覗き込んだ。

「……わからない」
「は？」
カルのとぼけた反応を受けて、ますますセイラは下を向いて視線をそらした。
「何、ということは、自分がどこから来たかわからない、と。でも名前はわかるじゃないか。その他に何かわかることはないのか？」
カルの顔にだんだん焦りの色が出てくる。
セイラもそれを察知して、申し訳なさそうに視線を横にずらす。
「名前しかわからないの。あと、物の扱い方とかある程度のことはわかる」
カルは盛大にため息をついた。
自分はなんてものと関わってしまったのだろうという嘆きでもある。

――これは、つまり、そうか、アレだ。

「じゃあ、お前は記憶喪失ってヤツなのか？」
カルはしばらく呆気にとられて、動けなかった。

とりあえず困っていても話は進まない。
抱え込んでしまったなら、最後まで責任は取る。

「まぁ、一人で不安なら、お前の記憶が戻るまで、俺と一緒に旅をするか？」
「うん、ありがとう」
セイラは笑顔でうなずいた。
その顔には安堵の色が出ていた。
カルを信用しきっているようだ。

――こうしてるとカワイイんだけどな。
カルは小さく息をついた。
今度の息には、あきらめもあったが、少し嬉しげな色も混ざっていた。

「この町にはもう用はないから、次の目的地を決めないといけない」
カルは広げたままの地図を覗く。セイラも同じように地図を見た。
その様子を見て、カルは小さく笑う。
「お前、地図の見方わかるのかよ」
少しからかうような調子でカルは言う。
セイラは口をきつく結び、カルを睨む。
「地図は読める」
カルはますます笑みを濃くする。
「あー、そーかい」

セイラはなんだか釈然としない思いだったが、なんだかカルが楽しそうだったので、良いということにした。

「カルは何で旅をしてるの？　目的の場所はないの？」
セイラはふと疑問を口にする。カルの顔は強張った。
セイラの顔も同時に強張る。何かまずいことを聞いたのだろうかと不安になる。
数刻が過ぎ、カルは観念したように、小さくため息を吐くと、ぽつぽつと言葉を口から出した。

「……俺は特に行く場所はないんだ。俺は……『光の国』を探してるんだ」
どうせ笑われるに決まってる。カルは気まずげにセイラから目をそらす。
セイラは一瞬きょとんとした顔をした。
「……『光の国』……って何……？」

カルはテーブルに頬杖をついていたが、思わず力が抜けて、手から顔が落ちた。
「……お、お前……知らないのか……？」
カルは困惑の視線でセイラを見た。動揺して顔が引きつっている。
だが、ふと思い当たる。セイラは記憶喪失だ。
普段の生活をするうえでの知識ぐらいしか覚えていない。
それなら、伝説や言い伝えなどわからなくたって当たり前ではないか、と。

「うーん……」
セイラは恥ずかしそうにうつむいた。
また、うつむかせてしまった。
カルは悪いことをしたような気がしてきた。

「まぁ、お前は記憶喪失だしな。たまたま知る機会がなかったのかもしれないし、知らなくても別に困るもんじゃないしな」
カルは妙に饒舌にまくしたてた。
「……ありがと」
セイラはそのカルの様子に笑みをうかべた。
カルはほっとして、そのまま話を続けることにした。
やっぱり、こういうところはかわいいんだよなぁ、と思いながら。
「まぁ、『光の国』ってのは、広く語られるおとぎ話みたいなもんなんだ。永遠の楽園と呼ばれるところさ。そんなあるかどうかわからない場所を探すから、特にこれと言った方向はないんだ。だから気の向く所へ行くだけ。いつもは地図を見ながら、道なりに歩いて、道が分かれればおもしろいものがありそうな方に行く。直感で決めるんだが。そんなところだ」
「なんだか楽しそうなことをしてるのね」
セイラは本当にそう思っているように、満面の笑みで言った。
カルは少し苦笑いを浮かべながら、その言葉を受け取った。本当に自分の言ったことを理解して言ってるわけじゃないと思ったからだ。

「とりあえず、俺はもうこの町にいるつもりはない。だから次に行く方向を決めようと思うんだよ。お前なんか感じるものないか？」
セイラは翼人だ。
翼人は神の使いだという言い伝えもある。
神秘的で美しい容姿もあるが、それぐらい不思議な能力を秘めた種族であるのもその理由だ。
どのような能力があるかはわかっていない。
だからこそ、その不思議な能力で『光の国』につながる方向へ向かないかと、カルはかすかに期待しているのだ。
セイラはしばらく地図とにらめっこをすると、何か思いついたように、地図のある一点を指差した。

「ここに森があるね」
セイラが指差したのは、この街から出て二股に分かれる道の西側。
カルは途端に嫌な顔をした。
「あー……ここか……」
「何かまずいの？」

カルは言いづらそうに口だけを動かしていたが、セイラがあまりにも見てくるので、たまらなくなり口にすることにした。
「……町で聞いた話によると、魔女が住んでるとかって聞いたんだよ。その森に行った者は誰一人帰らなかったっていう、すんげぇおっかねぇ魔女らしい」

「……思ったんだけど……」
セイラは少ししらけた目をしてカルを見る。
「な、何だよ……」
カルはその目から嫌な予感を察知する。
「カルって迷信深いよね」

グサ。

なんとなくセイラに見損なわれたように感じ、カルは心に棘が刺さったような気持ちになった。痛くて重い棘が。
だが、それを表に出さないのがカルである。
「わ、悪いかよ。でなきゃ『光の国』なんて信じて出てくるわけないだろ」
カルは開き直る。意地を張っているとも言えるが。とても格好が悪い。
「それもそうね。とりあえず、私はこっちに何かあると思ったんだけど、どうする？　魔女とか、いかにもな感じだね」

セイラはしょうがないなぁ、とまるで子供を見るような笑顔でカルを見ていた。
しかもカルを試しているような調子にも聞こえる。
カルはそれがわかったから、なんとなく腹が立つものの、どうしようもない。
ここは別なところで名誉挽回をするべきだろう。
「そうだな。おもしろそうだから、この森に行ってみるか。さっそく食料とかの準備をしないとな」
カルは怒りにひきつった笑顔と言葉で、セイラに向かってそう言った。

「じゃあ、さっそく」
セイラは意に介せず、相変わらずの笑顔で答えた。
カルは、なんとなくこれからの旅に不安を感じていた。

ー己の目的を定めること ー＜3＞

そうして彼らは現在、魔女が住むと言われる森にいる。きちんと長期間の食料などもそろえた。

「行くのか……？」

カルはこの期におよんで、少し腰が引けているらしい。

セイラは少し苛立ちを顔に浮かばせて、カルの腕を引いた。

「今更何を言ってるの。行くよ」

セイラに腕をひかれ、カルは渋々歩き出す。

「わかったから、腕を離せ」

カルはぶっきらぼうにセイラの手をふりほどき、セイラと先を行く。

カルの様子に、セイラはにこにこと笑顔だ。カルはこの笑顔が苦手だった。

しばらく歩いていると、先に一際日の光が眩しい場所が見えてきた。

何かと行ってみると、青く透き通る湖だった。

湖の側まで木が取り囲み、輝く日の光が降り注ぐ光景は、そこだけ特別な聖域であるかのように見えた。

「魔女の住む森ってわりには、ずいぶんいい所だな」

カルは湖の側に寄って、空を見上げた。

「そうね。鳥が鳴く声もするから動物もいるようだし。いい匂いもする、緑の。やっぱり自分の目で確かめてみないと本当のことはわからないよ」

セイラは得意げにカルの側に来てそう言った。

「へいへい、あなた様の言うとおりですよ」

カルは嫌そうにこびへつらうような口調で言いながら、懐から煙草を取り出し、火をつけようとする。

途端にセイラは目を鋭くして、カルの手から煙草を取り上げた。

行き場を失った火がカルの手に残る。

カルは顔を渋くして、手を振り、火を消した。

「あぁ、悪かったよ。癖なんだ。なるべく、お前のいない所で吸えばいいんだろ」

「私がいなくても、あんまりそれを吸うのは良くないと思う。それを吸うと、カルの声が聞こえなくなる」

セイラは、カルの言葉に悲しげに顔をゆがませる。

カルはセイラの言葉に、訳がわからない、という風に眉をひそめた。

「俺の声が聞こえないってどういうことだよ。俺は普通に喋ってる」

「カルの声は他の人と何か違う。私には、一番よく聞こえる声。でも、その煙を吸うと他の人と同じような雑音が混じった声になる」

カルはますます眉をひそめた。

「よくわかんないな。でも、まぁ、とりあえずお前が嫌がるなら、お前の前では吸わない。これで我慢してくれ」

セイラはまだ何か言いたそうにしていたが、言ってもどうしようもないと思ったのか、カルから視線をそらした。

「うん、わかった」

「……」

カルはなんだか悪いことをした気分になった。

だが、自分がどうしようが自分の勝手だ、と気にしないことにした。

とりあえず、火種の残りは、上着のポケットに入っている鉄の携帯灰皿に入れた。

互いに話しかけづらく、しばらくの沈黙が続く。何となくこの場から動けずにいた。
変わらず聞こえるのは、湖のたゆたう音、風で葉がこすれる音、鳥や虫の鳴き声だけ。
カルはその間、セイラの言ったことを考えていた。

――――カルの声は他の人と何か違う。
声のことを誰かに言われた記憶はなかった。
言ってくれるような誰かさえ、周りにはいなかったが。
だが、悪口なら言われ続けてきた。
声が変なら、きっと悪口で使われたに違いない。人間というのは、何でも悪口の種にできる。
しかし、そういうことは言われた記憶がなかった。
あっても、明らかにこじつけたようなものばかりだ。
――――考えていたってしょうがないか……。
行き場のない思考をまとめるのはあきらめ、セイラの方を向いた。

「セイラ……？」
が、セイラの様子がおかしい。湖の側に座り込み、ある一点を見つめ、恐怖に強張った顔をしていた。
「カル……助けて……」
セイラが弱々しく口を開いた瞬間、セイラの側の水だけが高く伸び、セイラを湖へ引きずり込もうとした。

「セイラ！！」

カルは引き込まれないようにセイラをとっさに抱えるが、驚くほどの強い力に対抗できず、一緒に湖に引き込まれていった。
後には、少し波打つ水面と、同じように鳥がさえずる声。
風は、いつのまにか弱まっていた。

「ん……」

カルは少し身じろぐ。

そして、次の瞬間には勢いよく飛び起きた。

「セイラ！」

「うるさい小僧だ。静かにしてくれ」

聞いたことのない女の声が答えた。それなりの年月を重ねてきたような、低く響く声だった。

カルは声のした方に素早く向く。

すると、目の前には、濃紺の布で体中を巻いた人物がいた。

かろうじて、顔と、その隙間からこぼれる黒い髪が見えるので、人の形はしているとわかる。

セイラは、その人物に抱えられ、目を閉じて――眠っているようだ。

カルはひとまずホっと息をつく。

「もっと穏便にことを運ぼうと思ったのだが、お前がしゃしゃり出てくるからいけないんだよ。うるさくするなら、湖に沈めちまうよ。悪いようにはしないから、黙っていな」

目の前の人らしきものの口が動く。この人物がやはり話しているらしい。一応声からして女のようだ。

というのも、目の前のものがあまりにも無機質な雰囲気をまとっていて、生物だとは感じられなかったからだった。

正直言って、気味が悪かったが、そんなことを言ってるわけにもいかない。

「セイラをどうするんだ」
カルはとりあえずその一言だけを言う。あまり余計なことを言って、相手をまた怒らせるのは都合が悪かった。
すると、女の周りの空気が変化する。刺すような空気が、少しゆらいだ。
「なんだ、私と同じ匂いがするから、てっきり同族だと思っていたんだが。何も知らないのかい」
どこかからかうような口調は、カルの癪に障った。

「どういう意味だ」
「教えてやろうか」
女の声が聞こえた次の瞬間、より近くに女の姿があった。女の威圧感を嫌というほど強く感じた。
カルは驚いて、目を見開いたまま、どうすることもできなかった。一瞬、何が起こったかも判断できなかった。
女は、そんなカルの様子をおもしろがるように、のどの奥で微かに笑う。
「数少ない同胞よ。その言葉どおり、私達はきょうだい。神に選ばれた人種さ。昔は栄えたものだが、他の民族があたし達を妬み、その栄光は過去のものとなってしまった。奴らは私達を恐れ、皆こんな風に暗い場所に追いやられたのさ。年月が経ってしまって、他の者はどうなっているかわからない。そしてあたしは人としての命をなくした。ここに残るのは、この世に未練を残した私の魄。魂はすでに転生の道へ戻された。お前は一体誰の子だろうね。見たことがあるような気もするが、今はそれはどうでもよいことだな。どうやらお前の親は、お前が生きることだけを望んだようだしね」
女はそこで一息つく。カルはあまりにも多くのことをつきつけられたため、言葉が出ない。
「だがお前はこの娘と出会ってしまった。神はやはり選ばれた者をお導きになるようだ」

沈黙が流れる。女はセイラの艶やかな髪を優しく撫でる。
女の表情は相変わらず読み取れないが、気配は穏やかになった。

ー己の目的を定めること ー＜４＞

「……俺はそれを信じていいのか……？」

混乱の中、カルはやっとそれだけ言う。その視線はまだ空をさまよう。

「それはお前が決めることさ。私は答えを与えない。お前が考えた結果がそうなら、お前の世界はそういう方向に変わる」

女の言葉は謎かけのようで、要領をつかめない。

つかまえたかと思えば、するりと手からすり抜けていく。流れるように細い絹の糸のようだ。

その存在は美しく、だがはかなく世界に映える。

伊達に旅を続けてきた訳じゃない。人が真剣な話をしている時の雰囲気ぐらい読めるつもりだった。

この女も、無機質な雰囲気を持ち、表情も見ることができないが、なぜか雰囲気で感情の起伏を推し量ることができた。

全て確証のない直感だが、この女を信じていいような気がする。

今まで直感で旅をしてきたのだから、今回もこの直感を信じる。

正直言って、この女が何を言いたいのかわからないところが多いが、この女の言うことをもう少し聞いてみようと、カルは思った。

「とりあえずあんたの言うことを聞いてみたい。結局、セイラはそれと何の関係があるんだ？」

カルの視線は女に据えられた。

女は、セイラに触れていた白い手を布の中へ戻し、カルに注意を向ける。

おもしろいものを見て楽しんでいるような空気をカルは感じ取り、なんとなく不快な気分になったが、この際気にしないことにした。

この女にとっては、カルはかわいいひよっ子であると、彼も感じていたからだ。

「……翼人と私達は昔から縁が深かった。彼らは神の言葉を伝える者として地上に遣わされたからだ。神の言葉を聞くことができるのは私達だけだった。彼らも私達と同じように栄えていたが、私達が滅べば、また彼らも生きていけなくなった。異のものとして扱われ蔑まされた。この娘は、そうして滅びていった翼人の生き残り。そして、お前も私達の血を引く。翼人と神に選ばれた種族がいれば、また楽園の扉は開かれる。世界は神の祝福を受ける。永遠の光の祝福を受けた楽園に世界は変わる」

話の内容とはあいまって、女の口調は抑揚がなく、事務的にことがらを伝えているように聞こえた。やはり気持ちが悪い。

そして、話の内容が進むにつれ、カルは一つ心にひっかかることがあった。

「つまり、俺とセイラはその楽園のために出会うべくして出会った、と言いたいのか」

なんだか自分が操られているような気分になり、カルは苛立ち気味に言った。

「私は神を信じているから、お前達は出会うべくして出会ったと信じている。だが、お前がそれを嫌と感じるなら、お前らが出会ったことにはまた別な理由があるかもしれない。しかし、今までの経験から言っても、出会いとは偶然ではなく必然が絡んでいると考える。そう感じざるをえない事例ばかりを私は見てきた。お前も、そう感じることはないか？」

「そんなことはわからない。とりあえず俺は、なんとなくその神様が思うとおりに世界を動かしてるっていうのが気に入らないだけだ」

カルは面倒くさそうに、あっさりと言ってのけた。

こういう時には、アレが欲しくなる。

カルは思わず懐に手を伸ばした。

「ここでは許さないよ」

女の言葉に、手が止まる。言葉だけでなく、何か見えない力で手を押さえられたような感覚がした。
「この娘に注意されなかったかい？　お前が好んでくわえているそれは、私達以外の人間に与えられた穢れた薬だ。世界の生物を選別するために神が世界におろしたものだ。神に選ばれたものがそんな薬を手にするなんて全く情けないね。お前はそれを手にするたびに身の聖性を落としていくんだよ。今からでも遅くない。楽園に行きたければその薬を断て」
カルは気まずくさまよう手をとりあえずおろした。
「ったく、何かと言えばすぐに神だ神だと。神が一体何をしたって言うんだ。だったらなんであんたらはこんな風になってしまったんだ」
「神は常に私達を見守っている。見ているだけだ。彼の手から放たれた私達は自由に世界を生きる。創造した彼を私達は敬うが、彼の下にあるのではなく、私達は常に何にも縛られず生きている。唯一私達を縛るのは、世界の理である自然法のみ。だから私達が落ちぶれたのはなるべくしてなった結果なんだろうさ。何がいけなかったのかは……わからないけどね……」
カルは小さくため息をはく。
「ちょっと待て。そしたら神に選ばれたってのはどういうことなんだ？」
「神は世界を見守るが、その中でも特に目をつけるものがあるんだ。彼らが世界を正しく導くと信じて。それが神に選ばれたものだ」
カルは口の端を持ち上げ、気の抜けたような笑みを浮かべる。
「なんだか神様も人間みたいだな」
「私達が考える神なのだから、人間のようで当たり前だ。人間以上にならないし、人間いかでは神になれない。私達は神を知りえないから、考えるのだ」
女の淡々とした口調に、カルは後ろに手をついて、姿勢を崩した。
何かが、ひっかかった。

「何でわからないものを信じれるんだ。自分達で作り出したとわかっているものをなぜ信じられるんだ」
女はニヤリと笑った、気がした。表情は見えないが、空気がかすかに揺らぐ。
その揺らぎ方が、笑い声のように聞こえた。
自分が笑われているような気がして、少し胸がざわついた。
実際、カルは今おかしいことを言っていた。
「光の国」を信じて旅をしている自分が何を言っているのか。
だが、この女が言うことはどうしてもひっかかった。聞かずにはいられなかった。
「所詮人などそのようなものさ。わからないことは何かと説明をつけないと発狂してしまいそうになる。だが、確かにどうしようもない巨大な力を感じているんだ。だから、何かはいると思ってる。それを敏感に感じ取れる人と感じ取れないヤツがいるだけ。感じ取れるヤツはよく神の声を聞く。そういうことだ」
女はカルの矛盾を気づかなかったように話を進めた。
カルは女の方を見たまま、眉間にしわを寄せる。
「俺には、さっきと同じことを言ってるようにしか聞こえないんだが。結局、質問の答えになってない」
「所詮この世に生きるものに、それ以上の存在のものはわからないということだ。それがあるのかさえわからない。ただ、説明できないことをそれに押し付けて自分を納得させているのさ。だから、答えは出せない」
カルは、後ろについていた手を離し、体を持ち上げた。
口の端を軽く持ち上げ、笑みをうかべていた。
なんだかこの話をしていると、体の奥がむずがゆくなり、つい顔が歪んでしまう。
でも、それは楽しくて笑っているのではなく、馬鹿馬鹿しいような、自分の根を探られているような、複雑な感覚によるものだった。

「なるほど、ね。……とりあえずわかったことにしておくよ。それじゃあその神様についての質問をしようか。あんたの言うとおりなら、神に選ばれた種族は、世界をうまく導けなかったから滅びたってことになるんじゃねぇのか？」
女の気配が、少しゆらぎ、重く沈んだ。
「……あぁ、そういうことだ。……だけど私には何がいけなかったのかわからない。だから、若いお前達がその答えを持っていると思っていたんだ……」
女の言葉が途切れ、気配が一瞬消えた。
カルは不穏な雰囲気に息をつめた――瞬間。
女の枝のような手が、布から目に見えぬほどのスピードで伸びる。
そしてその透けるほどの一本の白い手は、カルの首をつかんでいた。
一瞬のできごとに、カルはどうすることもできなかった。
「しかし私が、この私がお前の若い体を持っていたらどうだろう！　私はまたやり直せる。過ちは二度繰り返さない！　繰り返すはずがない！！」
布の間から、赤く光るものがカルを見つめる。
カルはその目にとらえられ、頭には何も入らない。
だが、女の気配がまたふと変わる。先ほどと同じような雰囲気を感じた。
赤い目も、消えた。布の隙間は、ただ闇しか見えない。カルの首にのびた手も、少し力を緩める。必死でこらえようとしているかのように、手が少し痙攣していた。
「だが、それは世の理に反する！　生きている者こそが生きる資格を与えられ、ゆえに美しく強い存在でいられるんだ！　なにより……お前達は輝かしい！　私はこの世への心残りが多すぎて、もはや自我が分裂しちまってる。強欲な私がお前を殺す前に、お前が私を殺せ……！」

先ほどと同じような低く響く女の声が、苦しげにカルに告げる。

―己の目的を定めること―＜5＞

「……ど、どうすれば……」
「生きている者はそれだけで強い。お前がよく使う武器を私に使え。その武器の威力ではなく、それに纏わりつく生気によって私は消える。……ほら、お前に触れているこの手も消えそうになっているだろ……」
見ると、確かに女の手が、カルの首に触れている部分から、光の粒子に包まれ、空気に溶けていっている。
カルは言われるがまま、腰にいつもつけている自動拳銃を取り出す。
手が震えて、思うように動かない。いつもなら、一瞬で相手に銃口を向け、いつでも引金を引けるようにするのに。
「早くしろ……！」
カルは言うことをきかない指をなんとか動かし、ゆっくりとセイフティをはずす。
「そうだ……」
女は苦しげだったが、どこか声には安堵の色がうかがえた。
カルは布の闇に向けて銃を向けた。
すると、急に女の気配が変わり、もう片方の手で銃身を捕まえた。
「させん……！　私が消えるなど……！」
カルは恐れは頂点に達する。とっさに、指は引き金を引いていた。
空気の震えが体の芯まで伝わる。その音は嘆きの声のようにも聞こえた。
すると、銃身にかかっていた重みはなくなっていた。
目の前から、女の気配はなくなった。
あるのは、薄っぺらく広がる夜空のような布が広がるだけだった。

しばらくカルはその場から動けずにいた。
どれぐらいの時間が過ぎたか、目の前でずっと眠っていたセイラが微かに声を出すまで、カルは動かなかった。
「……カル……？」
セイラは目を薄く開け、カルを確認する。
「……何だ」
カルはぶっきらぼうに答えた。その視線は布を見ていた。
セイラは起き上がり、辺りをせわしなく見回す。
「ここ、どこ……？　何でここにいるの……？」
カルはふっと口元をほころばせ、布を掴んで立ち上がった。そして、セイラに手を差し出す。
「なんだ、また記憶喪失か？　まぁ、ここから出たらゆっくり話してやるから……とりあえず立て」
セイラはカルの手を取り、まだ不思議そうに辺りを見ていた。
カルは、やや苦いものを含んだ笑みで、セイラの手を引いて歩き出した。

カルの背後から数百メートルの距離に、通路の入り口があった。
ただ向こうには闇が広がるばかりで、入るのがためらわれたが、他に外につながりそうな道はない。
二人は、覚悟を決めて、中に入っていった。
しばらく歩くと、青く光る螺旋階段が見えた。
そこだけがなぜ光っているのか不思議に感じて上を見ると、水のゆらめきが見えた。
湖の水面だろうか――。
カルはそう感じ、とりあえずその階段を上っていくことにした。

階段をどんどん上がると、だんだんと明るさが増していった。
水がたゆたうようにゆらゆらと揺れる階段に、少し不安を感じながらも、セイラはきれいだと喜びながら上っていた。
カルも別に悪い気分はしなかったので、それに合わせた。
日の光というのは、世界にあるどんな光よりも、強く輝かしいと感じる。
どんどん強くなる光に、眩暈を覚えるほどだ。
もうだいぶ上ったと感じた時、ふとその先の階段が消え、そこで意識が途切れた。
そうして気づくと、引き込まれた時と同じ湖の側にいた。

「……行くか」
カルは湖を見つめたまま、ゆっくりと立ち上がって言った。
どことなく寂しげな表情だった。手には、紺の大きな布を持っている。
「これからどこに行くの？」
セイラはカルを見上げながら立ち上がって聞く。
紺の布が気になるのか、カルの手に視線が向いた。
カルは苦笑いをうかべて、布を持ち直し、言った。
「とりあえず道なりに歩いて、道が分かれていたらその時に考えよう。ずっとそうしてやってきたんだから、これからもそうしてく。……道すがらに少し話もしよう」
カルは、荷物を背負い直して歩き出した。
「うん」
セイラもカルの後について歩き出す。なんだかその顔は嬉しそうだった。
何がそんなに嬉しいんだか、と自分も自然と顔がほころんでいるのに気づいていない。
ふと、懐に手が伸びそうになったが、今度は止めることができた。
とりあえず、セイラがいる前では吸わないようにしよう、とカル

は思っていた。
穢れた薬と、女は呼んでいた。人間を選別するためのものだと言っていた。
神は何のために人を試そうとするのか。
人は何のために世界に存在するのか。
求める答えは、楽園にあるのだろうか。
何にしても、歩かなければ始まらない。見なければわからない。

彼らは歩き出す。『光の国』を目指して。
まだ道は、長く続く。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
参考：「ＨＢ－ＰＬＡＺＡ」ｈｔｔｐ：／／ｇｕｎ．ｗｏｒｌｄ．ｃｏｏｃａｎ．ｊｐ／
ＲＡＮ　＊＊＊２００６／５／５＊＊＊

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2324t/

光の国

2011年8月6日03時31分発行